

名古屋市の徒歩帰宅体験訓練及びその事後調査

梶岡多恵子* 家田 重晴** 山内 康男***

Experience training of walking home in Nagoya City and a follow-up survey

Taeko KAJIOKA, Shigeharu IEDA and Yasuo YAMAUCHI

Abstract

On the assumption of the Tokai Earthquake, the Nagoya City Fire Bureau held "experience training of walking home", in which participants walk from a point in Nagoya where traffic is closed to an adjacent municipality where the railway operates as usual. The purpose of the this study was to examine the necessary supports for walking home in times of emergency, using an anonymous questionnaire administered after the training. The subjects were 100 persons including 22 junior high school students, 54 senior high school students, 19 university students and 5 adults (21 men and 79 women). Although more than half of subjects were able to walk the 6km distance without fatigue, the junior high school students tended to feel more fatigue than the other groups. The subjects indicated the necessity for food, drinks, maps and rest room breaks during the training; a similar tendency was also found in requests to the Nagoya City government. In addition, they desired information service, route guidance, and streetlamps to move safely. These results suggest that gas stations and convenience stores should undertake roles as shelter and cooperation bases for people walking home in an emergency.

I 緒言

1976年（昭和51年）に静岡県西部・駿河湾一帯を震源とする、マグニチュード8クラスの大規模地震、いわゆる東海大地震が起こる可能性が発表されて以来、東海各県では地震に備えて様々な取り組みが行われている。2001年12月には政府の中央防災会議によって東海大地震の最終報告書がまとめられ、その結果2002年度に、震度6弱以上が想定される地域などが該当する「地震防災対策強化地域」として、愛知県では名

古屋市や豊橋市など新たに57の市町村が追加され、全部で58になった。

このため、2002年度から名古屋市では、地震防災強化計画を策定するなど、地震防災のための施策をさらに強力に実施している。

計画では、東海地震の警戒宣言が出された場合に、鉄道、地下鉄、バスなどの公共交通機関の運行を打ち切ることになったが、名古屋市は市外からの通勤・通学者や買い物客などで日中の人口が大幅に増加するため、その際に多くの帰宅困難者が出ると予想され、その対策が最大

*名古屋大学総合保健体育科学センター研究生, **教授, ***名古屋市消防局防災部防災室長

の課題となっている。名古屋市では、判定会召集の段階で市長が市民に帰宅を呼びかけたり、学校も休校にするなどの対策を打ち出したが、一方、隣接する地域で強化地域に指定されていない自治体まで徒歩で歩き、そこから鉄道などを利用して帰宅してもらうという方法も検討している。

そこで今回、名古屋市は、中学・高校生及び大学生を対象として、東海地震の警戒宣言が発令され、交通機関の運行停止した際に鉄道が動いている隣接の自治体まで歩くという状況を想定した「徒歩帰宅体験」を中心とする防災訓練を計画、実施した。

本研究では、この訓練の概要を紹介するとともに、事後に実施したアンケート調査によって「徒歩帰宅体験」の参加者の感想や意見を調べ、帰宅困難者対策についての示唆を得ることを目的とした。

Ⅱ 徒歩帰宅体験訓練

徒歩帰宅体験訓練は、名古屋市消防局防災部の主催で2002年11月19日に実施された。一般参加者は、消防局から依頼された学校・大学から参加した女子中学生22名、女子高校生54名、大学生19名、及び一般成人5名の計100名（男性21名、女性79名）であった。

1. 徒歩帰宅体験

東海地震の警戒宣言発令によって、地震防災対策強化地域にある名古屋駅周辺の交通機関が全て停止したと想定し、強化地域外で交通機関の運行が確保される場所までの徒歩移動を試みた。徒歩帰宅体験には、一般参加者以外に、名古屋市、尾張旭市などの4市町の首長、職員が参加した他、マスコミ関係者約50名程度も同行した。

1) 一般参加者は、8時45分までに名古屋市名東区、地下鉄東山線上社駅構内にある「名東文化小劇場」の講堂に集合し、その場で共著者の山内からの訓練の趣旨説明、松原武久名古屋市長の挨拶、及び担当者からの訓練スケジュール



写真1 朝、名東文化小劇場の講堂で訓練についての説明を聞いた

ルとアンケート実施についての説明を聞いた(写真1)。また徒歩行程・施設が描かれた「帰宅支援マップ」や防災知識に関する資料が各人に渡された。なお、当日の早朝、名古屋鉄道の名古屋本線で列車が不通になる事故が発生したため、主催者側があやうく集合時間に遅れそうになったり、実際に集合時間に間に合わない大学生がいたり、偶然の要因で、訓練の最初から緊張感が漂うこととなった。

2) 一般参加者は、あらかじめ編制された4つの班に分かれ、終了場所である尾張旭市ボランティアセンターを目指し、約6キロの徒歩訓練を行った。参加者の服装は、中・高校生においては通学時の服装(学生服)、大学生は私服であった。各自の持ち物は筆記用具および昼食。携帯電話は各班のリーダーのみ携行した。

3) 東海地震に備えた初めての徒歩帰宅の訓練ということで、松原市長も中間点にある名東消防署豊が丘出張所(帰宅訓練支援所)まで、他の市町の首長らとともに行程を歩き、自ら「徒歩帰宅」を体験した(写真2)。

4) 中学・高校生及び大学生の「徒歩帰宅」の様子を、それぞれ写真3と写真4に示した。今回は、多人数で歩いたので、ただ前の人に付いて歩いていけばよかった。「帰宅訓練支援所」では、希望者にお茶などの飲み物が提供された(写真5)。なお、共著者の家田(写真6の左端)も学生といっしょに訓練に参加し、主に写真撮



写真2 徒歩帰宅体験に参加した松原武久名古屋市長



写真5 帰宅訓練支援所（名東消防署豊が丘出張所）



写真3 徒歩帰宅体験中の中学・高校生



写真6 配布された防災資料を手に持つ共著者とゼミナール学生



写真4 徒歩帰宅体験中の大学生



写真7 昼食時に非常食の試食も



写真8 災害図上実習の様子

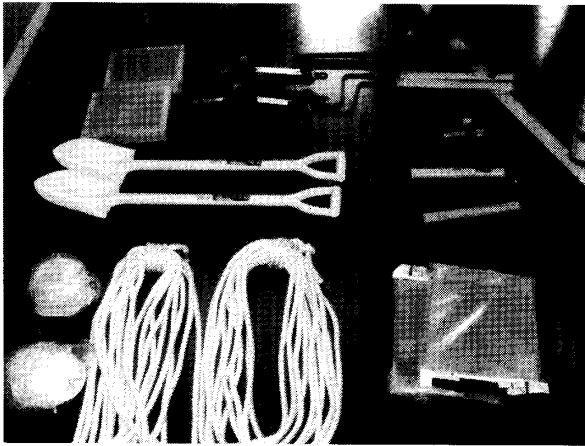


写真9 防災用品の説明を受けた



写真10 ジャッキで重たい物を持ち上げる練習

影をしながら全体を観察した。

5) 一般参加者は、1時間と少しかかって目的地である尾張旭市渋川福祉センターに到着し

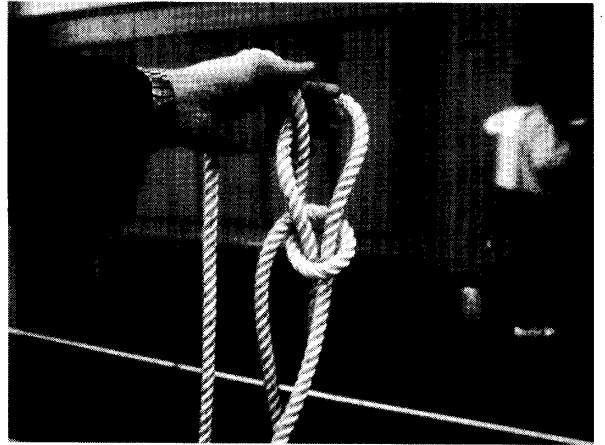


写真11 ロープの結び方を練習した

た。そして、しばらくセンター内で休憩した後、マイクロバスに分乗して名古屋市守山区にある名古屋市消防学校に向かった。

2. 名古屋市消防学校での訓練

以下の活動はすべて名古屋市消防学校で実施された。

1) まず、いくつかの教室に分かれて昼食を取ったが、その際、持参した食べ物その他、乾パンや缶詰のおかゆ・スープなど、非常食の試食もした(写真7)。非常食については、割合においしいという感想が聞かれた。

2) 昼食の後、同じ教室で、8~10人程度のグループに分かれて、DIGと呼ばれる災害図上実習(防災講座)を行った(写真8)。これに関しては別の論文に詳述する。

3) その後、体育館に移動し、防災訓練(救助体験)に参加した。ここでは、ペンチ、かなづち、ロープ、スコップ、ジャッキなどの防災用品(写真9)の説明を受け、また、ジャッキの使い方について指導を受けた(写真10)。ジャッキは、重い物に挟まれて動けなくなった人の救出などに用いることができる。次いで、全員にロープが渡され、避難の際に有用なロープの結び方を何種類か練習した(写真11)。

4) 教室に戻ってアンケートに回答をした後、講堂での閉会式に出席した。そして閉会式後、中学・高校生はそれぞれの学校まで送ってもらった。また、大学生は名古屋鉄道瀬戸線の

最寄駅まで送ってもらい、そこで解散した。

中学生22名、女子高校生54名、大学生19名、及び一般成人5名であった。

Ⅲ 事後調査

1. 調査方法

1) 調査対象者は、前述の一般参加者100名(男性21名、女性79名)、参加者の内訳は、女子

2) アンケート調査は表裏印刷の1枚の用紙(表1、表2)を用いて、無記名で実施した。また、前述のとおりアンケート調査の実施日は2002年11月19日であり、徒歩訓練の後、名古屋市消防局に移動後、災害図上実習(DIG)及び

表1 徒歩帰宅体験訓練アンケート(表面)

徒歩帰宅体験訓練参加者アンケート

※ あなたの番号を に書いてください。

○ あなたは、1 中学生 2 高校生 3 大学生 4 一般 です。

○ あなたは、1 男性 2 女性 です。

1) あなたがくたびれたと感じたのは、どこですか

1 高速道路の下ぐらい 2 消防署のところぐらい 3 サークルKのところ

4 中電のところ 5 橋のところ 6 最後までゼーンゼーン まったく平気

2) あなたが欲しかったものは、1 飲み物 2 食べ物 3 トイレ 4 地図 5 その他 です。

・「その他」ってなんですか、よかったらおしえてください。

1 おしえてあげない 2 おしえてあげる です。

3) 歩いている時 1 自動販売機 2 コンビニ 3 その他 で買い物をした。

・歩いている時 1 ジュース 2 食べる物 3 その他 を買った。

・「その他」ってなんですか、よかったらおしえてください。

1 おしえてあげない 2 おしえてあげる です。

・買い物をしたお店の場所をおしえてください。

4) 歩いているとき 何処で危険を感じましたか 1 道路 2 高架下 3 橋 4 その他

・「その他」ってなんですか、よかったらおしえてください。

1 おしえてあげない 2 おしえてあげる です。

うらもあります
↓

防災訓練の終了後に実施し、その場で用紙を回収した。

3) 質問項目は、参加者の所属校種等(中学、高校、大学、一般)と性別を尋ねた他、①徒歩訓練で「くたびれた」と感じた場所、②徒歩訓練の最中に欲しかったもの、③歩いている時に買った品物と買った場所、④歩いている時

に危険を感じた場所、⑤参加しておもしろかったか、つまらなかったか、⑥災害図上実習(DIG)を知っているか、また、知っている者についてはどのような方法で知り得たか、⑦訓練日の午後にあった「防災講座」、「救助体験」を含めて、どれが一番おもしろかったか、⑧どれがつまらなかったか、及び⑨もっと知りたいこ

表2 徒歩帰宅体験訓練アンケート(裏面)

5) 一人で夜、歩くとしたら何が必要となりますか、おしえてください。(何でも書いて)

6) あなたが歩いて帰宅するときに、私たち(名古屋市)に何をしてほしいですか。(何でも書いて)

7) 参加して 1 おもしろかった 2 つまらなかった です。

8) 災害図上訓練(DIG)を聞いたことがありますか。

1 ある 2 ない

・あるとこたえ方、どのような方法で知りましたか。

1 新聞 2 テレビ 3 広報なごや 4 地域の回覧板 5 その他

9) 一番おもしろかったのは、1 徒歩体験 2 防災講座 3 救助体験 です。

10) つまらなかったのは、1 徒歩体験 2 防災講座 3 救助体験 です。

11) もっと知りたいことがあったらおしえてください。

1 地震について

2 地震がくることをあらかじめ知る技術について

3 警戒宣言について

4 災害から人やまちを守ることについて

5 市役所や消防の役割について

6 地域の役割について

ありがとうございました

と、に関して選択式で回答を求めた。さらに「一人で夜、歩くとしたら何が必要となるか」、「歩いて帰宅する時に、名古屋市に対して何をしたいか」という質問に対しては記述式で回答を求めた。

2. 統計的検討

アンケートの結果については、⑥の災害図上実習 (DIG) に関する質問を除いた8つの質問項目と自由記述部分について検討した。選択肢が設けられている質問については、参加者の校種とのクロス集計も行った。なお、中学生と高校生の参加者に比較し、大学生と一般成人の参加人数が少なかったため、この両者を合わせて中学生、高校生、大学生 (一般成人を含む) という3グループで検討を行った。校種比較の検定には χ^2 検定を用い、いずれの場合も危険率5%未満を有意とした。

Ⅲ. 調査結果

1. 徒歩帰宅体験の最中に感じたこと

1) 徒歩訓練で「くたびれたと感じた場所」については、参加者のうち56名 (56%) が「最後まで全然平気」を選択していた (図1)。5キロ地点となる「橋 (印場橋) のところ」を選択したのは29名 (29%) で、校種別にみると中学生11名 (50%)、高校生11名 (20%)、大学生7名 (29%) であり、有意差はなかったものの中学生にやや、くたびれたと感じた者が多い傾向であった。

2) 徒歩訓練の最中に「欲しかったもの」については、食べ物31名 (31%)、飲み物28名 (28%)、地図14名 (14%)、トイレ8名 (8%) の順となった (図2)。「その他」を選択している者は8名いたが、具体的にその内容を記述していた者は3名で、「暖かい服」、「電話」、「トイレトペーパー」があげられていた。本質問の回答には校種間の有意な差はなかった。

3) 「歩いている時に買った品物」については、ジュース2名、食べる物1名、「その他」を選択した者が5名あった。「その他」について

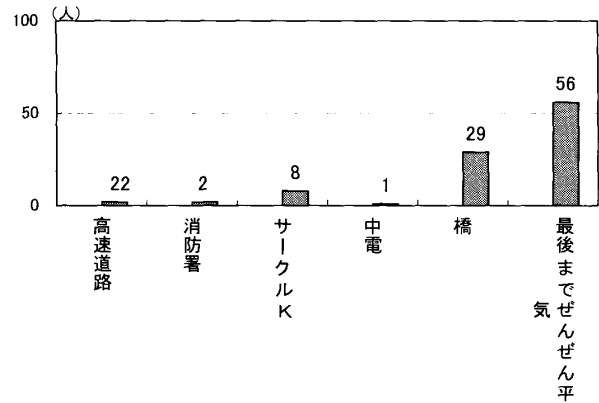


図1 徒歩訓練で「くたびれた」と感じた場所

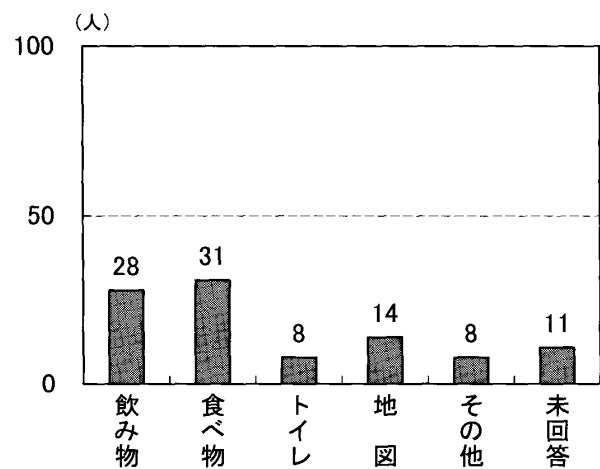


図2 徒歩訓練の最中に欲しかったもの

は内容について記述した者がいなかった。また、残りの者92名 (92%) は未回答であり、何も購入していないものとした (図3)。「買った場所」としては、自販機、コンビニ、「その他」となっており、「その他」の内容としては、ガソリンスタンド (自販機) があげられていた。本質問においても校種間の有意差はなかった。

4) 「歩いている時に危険を感じた場所」については、道路37名 (37%)、橋23名 (23%)、高架下22名 (22%)、その他8名 (8%)、未回答者10名 (10%) という回答状況であった。本質問では校種間に有意差が認められ ($P < 0.001$)、高校生、大学生では、危険を感じた場所として「道路」を選択している者の割合が最も多く (高校生22名、41%、大学生9名、38%)、中学生では「橋」を選択している者が最も多

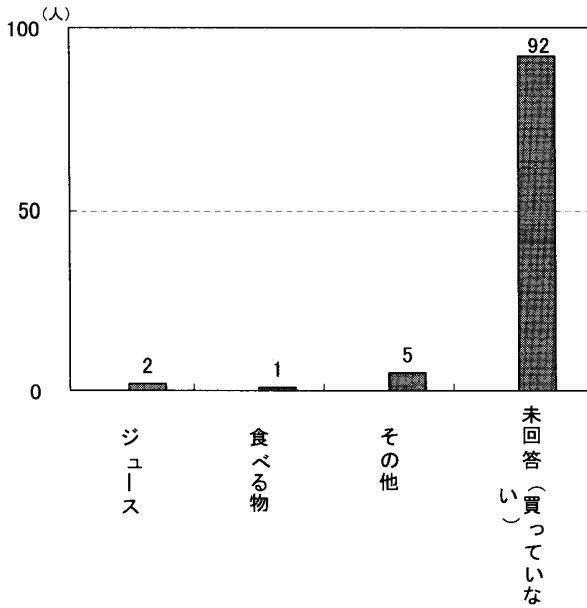


図3 歩いている時に買った品物

かった(10名、45%) (図4)。

2. 徒歩帰宅体験に参加して感じたこと

1) 徒歩帰宅体験に参加して「おもしろかったか、つまらなかったか」、という質問については、96名(96%)が「おもしろかった」を選択しており、残り4名(4%)が「つまらなかった」を選択していた(図5)。本質問には校種間の有意差はなかった。

2) 徒歩帰宅体験訓練の当日に予定されていた「防災講座」、「救助体験」を含めて、「どれが一番おもしろかったか」、「どれがつまらなかったか」という質問では、「おもしろかった」ものは多い順に、「1.救助体験」62名(62%)、「2.防災講座」22名(22%)、「3.徒歩体験」11名(11%)、また「未回答」5名(5%)であった。一方、「つまらなかった」ものは多い順に、「1.徒歩体験」38名(38%)、「2.防災講座」29名(29%)、「3.救助体験」6名(6%)、また「未回答」が27名(27%)であった。いずれの質問にも校種間の有意差はなかった。

3) 「もっと知りたいことがあるか」という質問について、最も多く選択されていたものは「地震がくることをあらかじめ知る技術」35名(35%)、次いで「地震について」15名(15%)、

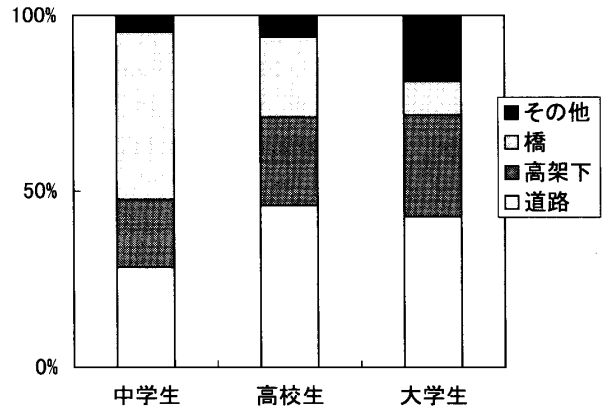


図4 歩いている時に危険を感じた場所

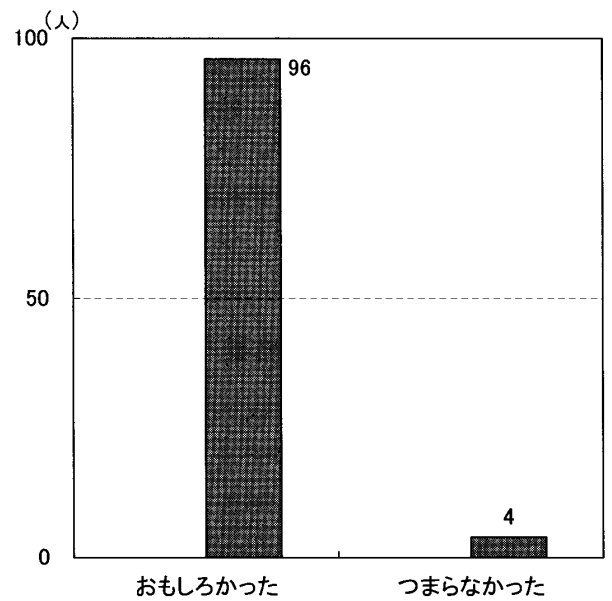


図5 徒歩帰宅訓練に参加して

「災害から人やまちを守ることにについて」14名(14%)、「警戒宣言について」13名(13%)、「地域の役割について」7名(7%)、「市役所や消防の役割について」5名(5%)であった。本質問でも校種間の有意差はなかった。

4) 「一人で夜、歩くとしたら何が必要となるか」という質問には95名(95%)が、「歩いて帰宅する時に、名古屋市に何をしたいか」については90名(90%)が、おのこの回答を記していた(資料1、資料2)。

「一人で夜、歩くとしたら何が必要となるか」では、懐中電灯、電気、電灯、ライトなどの回答が多く、また携帯電話を上げた者も多かった。

「歩いて帰宅する時に、名古屋市に何をしたいか」では、食べ物や飲み物の提供、トイレの確保、地図や情報提供、道案内（誘導）、街灯や電灯などの要望が多かった。

Ⅳ 考察

今回、名古屋市消防局が実施した「徒歩帰宅体験訓練」は、青少年が実際に強化地域外まで自分の脚で歩くという参加型の防災訓練活動であった。行程は名東区から尾張旭市までの約6キロであったが、半数以上の者（56名、56%）は「最後まで全然平気」という選択肢を選んでいった。現代生活では歩く機会が減少傾向にあるものの、参加者にとって6キロという行程は疲労困憊に至る距離でないことが示唆された。ただし、中学生（すべて女子）では約5キロ地点となる「印場橋」を「くたびれた地点」として選択している者の割合が、他の校種に比較すると多い傾向が見られたが、これは年齢的な体力差が関係しているのではないかと考えられた。

「徒歩訓練の最中に欲しかったもの」については、食べ物に次いで飲み物が多く選択されていた。また、人数はそれほど多くはなかったが、徒歩訓練の途中で品物を購入した者もあり、その内容としては「ジュース」、「食べ物」があげられていた。今回の徒歩帰宅体験訓練のスケジュールでは、参加者はまず午前8時10分までに自分の所属する学校に行き、そこから徒歩訓練の出発地点となる名東文化小劇場に集合したため、朝食の摂取が早い者では午前6時頃となり、訓練途中に空腹感や喉の渴きを覚えたものと思われる。

実際に地震災害が起こり、徒歩で強化地域外に移動しなければならない時には、数km～10数kmの道のりを歩かなければならず、季節によっては喉の渴きが増すこともある。自動販売機での購入も考えられるが、売り切れなどで使用不可能となることがあり得る。また、コンビニエンス・ストアでの購入にしても、一時に多くの人が押し寄せ混乱することが予測される。

災害時の非常持ち出し品として、懐中電灯、

ラジオ、救急医薬品などと並び、缶詰や水などを各家庭に準備しておくことは呼びかけられているが、通勤通学など、家庭を離れている際に地震災害が起こることもあり得るため、平日頃から水分を携行しておくことは、防災対策の一つとしても有効ではないか。また、人数はそれほど多くはないが、欲しかった物としてトイレやトイレットペーパーを選択している者がいた。記述式の「歩いて帰宅する時に、名古屋市に何をしたいか」という質問でも、食べ物や飲み物の提供とともにトイレの確保を求める意見も多かった。

先の阪神・淡路大震災の際も人間の生理現象である排泄処理の問題は深刻であり、仮設トイレの要求が非常に多かったとされている。今後、「コンビニ」やガソリンスタンドなどに、トイレの使用許可も含めて、子どもの犯罪被害防止や地震などの災害発生時の避難場所・協力拠点としての役割を求めることが、益々重要になってきているといえよう。

なお、名古屋市としては、訓練コースの「コンビニ」、ガソリンスタンド、及び学校に対して、当日、トイレ使用の許可を得ていた。

「歩いて帰宅する時に、名古屋市に何をしたいか」という、災害時に備えた行政への要望については、先に上げた食べ物、飲み物、トイレの他では、情報提供や地図、道案内（誘導）、街灯や電灯の要望などの記述が多く、「安全」に帰宅できるための設備等にも強い要望があることが分かった。

また、同様に記述回答を求めた「一人で夜、歩くとしたら何が必要となるか」については、「夜」という状況設定をした質問内容であるため、「懐中電灯、電気、電灯、ライト」といった明かりに関するものが多かった。また、我が国では携帯電話の普及率が40%を越え、小中学生でも携帯電話を持つことが珍しくなくなったが、本質問の回答にも携帯電話をあげている者が多く、時代を反映した回答だと思われる。

次に「歩いている時、危険を感じた場所」という質問では、校種間に有意差が認められ、高校生、大学生では「道路」を、中学生では「橋」

を選択している者が多かった。本質問においては、4つの「場所」を選択肢としてあげているのみで、「なぜその場所を選択したか」という理由は明らかにされていないため、校種間の差をどのように解釈するかはかなり難しい。

地震発生時における道路では、頭上からの落下物、あるいは建物の倒壊、自動販売機などの横転といった危険が考えられ、さらに激しい揺れが起こった場合は、操作不能となった車輛による事故なども予測される。狭い道や交差道路のない一本道では、多くの人々が一度に避難すると混雑による事故も考えられる。一方、橋の場合、地震が起こった時には亀裂や落下という事故が予測される。また、狭い道や交差道路のない一本道と同様に、一時に多くの人々が避難する際、橋も非常に危険な場所となる事は、2001年に兵庫県明石市で起こった「花火大会・歩道橋事故」で多くの人々の命が失われたことが証明している。「危険を感じた場所」を選択する際には、想像力が強く関与するため、中学生では、「橋」が危険な状態をイメージしやすいためにこれを選択した者が、多かったのではないかと推察される。

「徒歩帰宅体験」を「おもしろかった」、「つまらなかった」という2つの選択肢のうちいずれかを選ぶ質問では、ほとんどの者が「おもしろかった」を選択していた。しかし、同日に実施された防災講座と救助体験を含めて「一番おもしろかったのは」という質問では、「徒歩帰宅体験」を選んだ者は最も少なく、逆に「つまらなかったのは」という質問では、「徒歩帰宅体験」を選んだ者が一番多かった。これらの結果を見ると、今回の参加者においては、徒歩帰宅体験訓練の参加自体もおもしろかったが、参加型の災害図上訓練（防災講座）やロープの結び方などの防災訓練（救助体験）はさらに興味深かったことが分かる。したがって、時間は長くなるが、「徒歩帰宅体験」を行う際に、それだけに止めず、今回のように参加型の防災講座や防災訓練を同じ日に行うことは、参加者の満足度を高める上でも大変に利点があるといえよう。

最後に、「もっと知りたいことがあるか」については、「地震がくることをあらかじめ知る技術」を選んだ者が最も多く、次いで「地震について」、「災害から人やまちを守ることにについて」、「警戒宣言について」が同じくらいであった。一番多い回答に関しては、近年、東海地震については地震予知が可能であるといわれるようになったが、その点に関する詳細がまだあまり知られていないことを反映する結果だと考えられる。「警戒宣言について」もこれと同様であり、東海地震の防災対策に関する基本的な教育を、もっと広める必要があるだろう。

「災害から人やまちを守ることにについて」を選んだ者が1割以上いたが、この回答には、自分や家族などを守りたいという気持ちや自分たちにできることはないかという積極的な気持ちが表れていると思われる。「徒歩帰宅体験訓練」への参加によって、これらの気持ちが高まったのだとしたら、大変に喜ばしいことである。

V まとめ

1) 徒歩帰宅について

徒歩帰宅体験訓練は、名古屋市消防局防災部の主催で2002年11月19日に実施され、100名が一般参加者として訓練に参加した。

「徒歩帰宅体験」には中学生、高校生、大学生（一般成人を含む）と異なる校種の青少年が参加したが、6キロの行程は半数以上の者が疲労を感じることなく徒歩で移動することが可能な距離であることが示された。ただし、中学生（すべて女子）は、年齢の関係か、やや疲労を感じる者が多い傾向であった。

「徒歩訓練の最中に欲しかったもの」については、食べ物、飲み物、地図、トイレの順に多く選択されていた。また、名古屋市への要望でも、徒歩帰宅の際の食べ物や飲み物の提供やトイレの確保を求める意見が多かった。さらに、名古屋市への要望では、地図や情報提供、道案内（誘導）、街灯や電灯の要望なども多かった。

近年、子どもの犯罪被害防止のための「子ども110番の家」運動が全国に広がっている。これ

には地域の民家、商店やガソリンスタンドなどが協力しているが、今後は、「コンビニ」も含め、これらの施設が、子どもの犯罪被害防止に加えて地震などの災害発生時の避難場所・協力拠点となるように、地域で話し合っていく必要があるだろう。

2) 「体験」訓練について

次に、「徒歩帰宅体験」に対しては「おもしろい」と答えたものがほとんどであった。しかし、他の体験型の「防災講座」やロープの結び方などの「救助体験」と比べると、それらの体験型活動の方が、さらに「おもしろい」と感じたようである。「徒歩帰宅体験」を実施する際には、今回のように体験型の防災講座等を組み合わせることが、参加者の満足度を高めるためにも、望ましいやり方といえよう。

「もっと知りたいこと」の回答からは、東海地震の防災対策に関する基本的な教育をさらに広める必要性が示唆された。

なお、訓練後のアンケートは、災害が起こった場合をイメージしたり、危険を感じた場所を考えることなどを求めることによって、訓練を振りかえる機会を与えるので、徒歩帰宅体験を単なる「遠足」に終わらせないためにも、大変重要だと思われた。

本研究は、財団法人伊藤忠記念財団の平成13・14年度委託研究、「子どもの危機管理の実態とその改善方策に関する調査研究—家庭・学校・地域の連携をめざして—」の一部として実施したものである。

参考文献

- 1) 三浦康道：「地域・地区・防災まちづくり」、オーム社、1995
- 2) 地震防災対策研究会・消防庁震災対策指導室：「地震防災対策ハンドブック—地域における震災対策の実務—」、消防庁、1997

〈資料1〉

(問5) 一人で夜、歩くとしたら何が必要となりますか。

- 明かり (4人)
明かり・ラジオ・食事
懐中電灯 (8人)
懐中電灯・携帯電話 (2人)
懐中電灯・携帯電話・お茶・防寒具・ポケットラジオ
懐中電灯・携帯電話・財布・家の鍵・冬なら防寒具
懐中電灯・携帯電話・友達
懐中電灯・携帯電話・飲み物・食べ物・防寒具・お金
懐中電灯・携帯電話・人
懐中電灯・携帯電話・防寒具
懐中電灯・食料水・使い捨てカイロ・携帯ラジオ
懐中電灯・食べ物・飲み物
懐中電灯・痴漢対策のブザー・お金
懐中電灯・地図 (5人)
懐中電灯・地図・携帯電話
懐中電灯・地図・携帯電話・MD
懐中電灯・地図・情報となる物 (携帯電話・ラジオ等)
懐中電灯・地図・食べ物・飲み物
懐中電灯・地図・食べ物・飲み物防寒具
懐中電灯・地図・非常食等
懐中電灯・電気・ラジオ
懐中電灯・時計・携帯電話・お茶・防寒具・ポケットラジオ
懐中電灯・時計・防寒具
懐中電灯・防寒具 (4人)
懐中電灯・防寒具・雨具
懐中電灯・防寒具・携帯電話
懐中電灯・防寒具・水・地図
懐中電灯・物をどけるもの・防寒具
懐中電灯・ラジオ (2人)
懐中電灯・ラジオ・カッパ
懐中電灯・ラジオ・小銭
懐中電灯・ラジオ・マッチ
懐中電灯等明かりとなる物・可能ならば連絡手

段

懐中電灯と防犯ベル

懐中電灯や防寒具。

帰るための道しるべ。食料等々。勇気・元氣

携帯電話

携帯電話・ブザー・懐中電灯・セコム

携帯電話・ベル

携帯電話・ライト・お金（2人）

警報機・携帯電話

公衆電話・地図・電灯

護身用の用具・防犯ブザー

ご飯。夜は寒いので暖かい服。

怖がらない勇気・明かり

自転車・懐中電灯・地図

タオル・懐中電灯・ティッシュ・マフラー・

コート

適度な光・自分の居場所を回りに知らせるもの。

電気

電気・懐中電灯

電気・地図・公衆電話（テレカ・お金）

電気・電話・食べ物・防寒具

電気・笛

電気・防寒具

電気は必要。あと地図と電話と今は冬なので温かい飲み物、マフラー等。空腹時に備えて食料も。

電灯

電灯・懐中電灯・食料品

電灯・地図・公衆電話（テレカ・お金）

電灯は絶対ほしい。防犯ブザーや携帯電話があると人がすぐに呼べるかも。

飲み物・食べ物・懐中電灯等

光。あと冬なら自分を暖められるもの。地図や表札。暗い中知ってる道でさえ歩くのに迷うのに学校から帰れるわけがない。

非常時にでも付く街灯・懐中電灯・防寒具・食料

ペンライト

防寒できるもの。懐中電灯・防犯ブザー・小銭
防犯ブザー・懐中電灯・武器・電話（絶対つながる）・防寒具

防犯ブザー・携帯電話・懐中電灯（2人）

防犯ブザー・財布・携帯電話

夜だから足元が見えるように電気や寒さをしのげるような防寒具。あとブザー等

ライト（2人）

ライト（携帯用）・防犯グッズ・手袋・帽子・マフラー

ライト・地図

ライト・地図・飲食物

ライト・地図・公衆電話・お金

ライト・防寒具や寒さをしのげるもの

ライト等光を出すもの（2人）

ラジオ（ライト付き）車のライトに反射するもの・携帯電話

〈資料2〉

**（問6）あなたが歩いて帰宅するときに、
私たち（名古屋市）に何をして欲しいですか。**

歩いて帰る道を確認してそこには車を入れないところを用意し市民に熟知させておく。

安心。

安全性を高めること。

安全な場所・食事・家族、友人の安全。

いつでも入れる店。

今どうゆう状況なのか等の情報。

飲食物の支給。夜で暗かったらライトがほしい（2人）。

上にも書いたが道しるべになるようなもの。体力はあるとして一番困るのは帰り方だと思う。

街灯（たくさんを臨時でもいいから）・トイレ・電話・アナウンス情報。

街灯をたくさんつけてほしい。裏道は本当に暗い。

街灯を増やしてほしい。

帰り道を教えてもらいたい。安心させてもらいたい。

帰るために分かりやすい道案内。

帰る所を聞いて帰る手段を教えてください。

完全に帰宅できるように明るくしてほしい。

完全に帰宅できるように道路の整備を整えてほしい。スタンドは火事につながるので

れを防ぐ方法。家族に安全を連絡できるように
公衆電話等。(2人)
休憩所・道路を広くしてほしい。
休憩所を作ってほしい。
給水(2人)。
現実の情報がすべての人に伝わるように教えて
ほしい。
公衆トイレを設置してほしい。地図等置いてほ
しい。自販機(お菓子とかの)
ももっとあると良い。
交通整備(2人)。
交通整理・食料。
交通整理をしてほしい。
ご飯がほしい。家まで送ってほしい。
ご飯がほしい。家まで送ってほしい。標識があ
るといい。
混雑を最小限におさえ指示してほしい。
時間を決めて見回りしてほしい。
情報。
情報・地図みたいなもの。
情報がすべての人に分かるようにしっかり教え
てほしい。
情報提供・飲料水提供。
情報提供・道案内。
少しでも誘導してほしい。どうすればいいか、
どうするべきか。できる範囲で何か指示を出し
てもらえるだけでも冷静になれる気がします。
正確な情報と指示。
その地域の案内人・区域ごとに自分の家の近く
まで誘導する人。
そのときの状況を放送等でどこにいても聞ける
ようにしてほしい。車で迎えにきてほしい。バ
スでもいい。
食べ物。
食べ物の支給・引率の人がいてほしい。冬の寒
い日なら防寒具を配ってほしい。
食べ物や飲み物を配布してほしい(2人)。
地図。
地図の作成・方面ごとの案内(2人)。
地図を配ったり居場所を確認できるものを設置
してほしい。温かいお茶を配る休憩所とかがあ
るといい。(トイレも)

手助け。
電気をつけてほしい。
電車の即刻復帰。
電車を動かしてほしい。家が一宮なのでとても
大変だから。
電灯を色々な場所に付けてほしい。コンビニ
も。
電灯を付けてほしい。見回り等をしてほしい。
電灯をもっと付けてほしい。
電灯をもっと付けてほしい。(住宅街)
電灯をもっと付けてほしい。信号が長いところ
がある。見回り。ロープが一家に1本ほしい。
トイレ、食べ物等の配布。
トイレ・地図・食べ物の支給・現在地。
トイレトペーパーの配布・道しるべとなるも
のを作ってほしい。
トイレの設置・情報提供・飲料水・食料。
トイレを増やしてほしい(2人)。
道路の交通整理。
どこでも情報が入るもの。地図になる物(看板
等に表示してあれば迷わなくても済む)。
途中、炊き出しや給水所。
途中で休憩所をある程度の距離で作ってほし
い。電話を貸してもらえるところも。
途中休める場所を作ってほしい。
なるべく誘導してほしい。
何メートルかごとに誘導係の人達にいてほし
い。
飲み水等の支給。
飲み物・食べ物がほしい(2人)。
飲み物・食べ物をあらかじめ少し渡してほし
い。
人が多くなり混乱すると思うので誘導してほし
い。
人がスムーズに流れるようにする。
避難場所への誘導がほしい。
冬だったら防寒具がほしい(軍手やマフラー)
・引率の人がいてほしい。飲食物がほしい。
道案内(2人)。
道案内をしてほしい。
道が歩ける状態じゃなかったらちゃんと歩ける
道に。

道に迷ったりしたら困るので案内する人。道に倒れているものとかをよけてくれるといい。道を明るくしてほしい。道を教えてほしい。道を見回り。見回りや地図等の配布。迎えにきてほしい。帰り方を教えてほしい（2人）。誘導。誘導・危険場所の指示・車の整理。ラジオや電光掲示板等で交通や街の情報を流してほしい。夜なら非常灯がほしい。